

港の思い出

アコスタ マリア ベレン

【アルゼンチン】

私の人生において、海を眺める時はいつも大きな変化の始まりを表します。港の忙しさと静けさが行ったり来たりする場所で柔らかな波の音を聞き、遠くに沈む太陽を見ると、その環境で大切な決意をしようという気持ちになります。

その一つは日本に来る前の目です。父と港を見に行くと、波が岩に砕けるのを見ながら、父は、「父から離れていても一人ではありません。日本でいい友達を作って、その人たちの良いところを学びなさい。心を開けば、相手も心を開いてくれますよ」と言ってくれました。そう言ってくれた理由は、私にとって子供の頃からずっと友達を作ることが難しかったからです。他人を信用できなかつたし、心を開けば、心を刺されるかもしれないとよく思っていて、一人でいる方が安全だと感じ、自

分を守りたいという気持ちが強かったのです。
でも、日本での生活が私の考えを変えました。
なぜかというところ、この間、友達が辛い時期を過ごしているのに気づいたので、一緒に神戸港に行き、気分転換をしようと思ったのです。そこで、神戸の綺麗な海の眺めを見ながら、思わずこの友情がどれほど大切かを伝え、あなたは日本で一人じゃないことを伝えたのです。そして私は父の言葉が理解できるようになりました。その後私たちは月の白い光の下に座り、風を感じながら並んで座っていて色々人生について話しました。そのなかで心を開くことで友情の大切さを実感することができ、それは日本での一番大切な思い出となりました。この経験で私の良い気持ちを友達の心の奥に届けたい、これからもっと信頼される人になりたいと強く思うようになりました。心は自分の意志ではなく自然に開くものです。新たな航路を進む船のように未来に向けて新しい視点で生きようと思います。